「私、お医者さんになる。」　―横山醇―

「私、お医者さんになる。」

夕食の最中に、とつ然醇が宣言しました。

家族はおどろいて、はしを持つ手が宙に止まり、醇を見ました。

「私、お医者になって、病気で苦しんでいる人を救うの。」

醇は、もう一度強く言って、茶わんのご飯をかきこみました。

これは、醇が密かにいだいていた夢でした。

通っている女学校にある付属病院や、看護学校の様子を見て、医師になって病気に苦しむ人々を治すことができれば、と思い続けていたのです。

醇のとつ然の宣言に家族がおどろいたのも無理はありませんでした。

このころ、時代は明治の初め、日本が開国してまだそれほど時が経っていないころでした。女性に学問など必要ないというような社会で、医師といえば男の職業と決め付けているような世の中だったのです。

しかし、醇の父省三は落ち着いていました。

「よかろう。女も自立するために学問することが必要じゃ。醇、やってみい。」

そう言って、醇の夢を後おししてくれました。

大阪の薬学校で学んだ後、一八九四（明治二十七）年、醇は医師を目指し、上京して男女共学を認める医学校に進学しました。

しかし、男女共学といっても名ばかりで、学校でもあいかわらず、男子の立場が上、という古い考え方が残っていました。

授業中、教授から、女子学生は後ろで立って聞け！と言われ、醇は三、四名の女子学生と広い教室の後方で立ったまま講義を受けました。

友達の女子学生たちは、不平不満を口にしました。

「私だってくやしいわ。でも私たち、医者になろうと決心してここに来たんじゃない。ここでくじけてはだめよ！」

醇は、仲間たちを、そう言ってはげましました。

それから、かの女たちはけん命に勉強しました。

男子に比べ不利な条件で受けた講義で書き取ったノートを持ち帰り、夜をてっして清書しながら覚えていくという日々が続きました。

醇は、「十分な条件で勉強することができなかったからだめでした」とは、絶対に言いたくはなかったのです。

二年間の努力の末、醇は医師国家試験に合格しました。

「これでお医者さんになれる。病気で苦しんでいる人たちを助けることができる。」

医師めん許状を手にした醇は、これからの自分の未来にときめきました。

一八九七（明治三十）年、兵庫県で初めての女性の医師が誕生したのです。
しかし実際に病気の人を治すためには、まだまだ経験が足りませんでした。
醇は医者としてのうでをみがくため、再び東京に行き、実地での研修に打ちこむのです。
「女だって立派なお医者さんになれる。」
醇はそう信じて研修にはげみました。
醇の強い決意と、そのがん張りを認めて応えんする人々の存在が、厳しい研修の日々を支えました。
東京で、当時の有名な医学の先生から子供の病気を治す指導を受けた醇は、日本で初めての小児科の医師になりました。
研修を終えた醇は、ふるさとの龍野（現在のたつの市）にもどり、病院を開業しました。
女性が病院を開くというのは、この時代、とてもめずらしいことでした。

「だいじょうぶよ。すぐに治るからね。」
こわがる子供に優しく話しかけながらしん察する醇の評判は、少しずつ広がっていきました。
「醇先生にみてもらうだけで安心や。」
しん察を受けた母親の言葉を聞きながら、醇は子供の目を見て、ただうれしそうにほほえみかけるのでした。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。